

<研究ノート>

朱基徹牧師の殉教信仰

方 俊 植

<目次>

1. 問題
2. 朱基徹牧師の研究とその現状
3. 朱基徹牧師の生涯
4. 展望

1. 問題

韓国のキリスト教は、18世紀中国から伝来し、飛躍的な発展を成し遂げた。その理由として注目されているのが、日本による植民地の統治である。A. E. マクグラスは、韓国のキリスト教が、珍しくナショナリズムに結びついていることを、以下のように指摘している。

「アジアの他の地域では、キリスト教は容易に、その批判者に、西洋帝国の追従と言われた。しかし、韓国では、敵は西洋ではなく日本であった。この時代の間、ずっと、キリスト教徒は韓国の独立運動で、その人数の割合にはつりあわないほどの活動的役割をはたした。」^{*1}

このような韓国のキリスト教の伝統は、1970年代の民主化闘争と民衆神学運動に展開されるのである。すなわち、韓国のキリスト教の特徴の一つは、「積極的な社会変動への参与」であると言っても過言ではない。本稿では、日本の植民地時代に、自分の信仰を貫いて殉教した朱基徹 (Choo Kicheul) 牧師の「生涯」を紹介することによって、われわれが直面する問題の再確認を目指す。なぜなら、朱基徹牧師の殉教は、当時の歴史的な背景は勿論、キリスト教の思想、キリスト教と国家・社会に関わる多様な問題点を抱えているからである。また、彼が今日、韓国のキリスト教にどのような影響を与えたかについても興味深いところである。以上のような議論を念頭に置き、朱基徹牧師について考察を行ってみたい。

2. 最近の朱基徹の研究とその現状

本稿では、『愛の殉教者、朱基徹牧師研究』という著書に従って議論を進める。著者で

ある李徳周はメソジスト神学大学出身で、メソジスト教会の牧師とメソジスト神学大学での講義を担当している。朱基徹研究における本書の意義は以下の二点である。まず、(1)これまで長老派の枠組みの中で記述されてきた朱基徹の思想を他宗派の研究者が本格的に取り上げたこと、(2)朱基徹研究の最近の状況を紹介するとともに、今日、なぜわれわれに朱基徹牧師の研究が必要とされるのか、という理由を明確にしたことである。

李徳周は、これまでの朱基徹研究を振りかえり、彼をもっと広範且つ詳しく論じる必要性があったと指摘する。その理由は以下のようなものである。

「第一、朱基徹牧師に対する長老派中心の解釈を克服する必要性がある。

第二、朱基徹牧師の殉教を中心とした解釈を克服する必要性がある。

第三、朱基徹牧師の生涯と信仰を分析するにあたって、金インソ中心の解釈を克服する必要性がある。」^{*2}

つまり、李徳周によると、今までの研究において、朱基徹は典型的な長老教会の牧師として、イエス・キリスト中心、聖書中心、教会中心の改革主義信仰の持ち主であり、1930年代、自由主義と神社参拝という挑戦から韓国の教会を守った人物として取り上げられてきた。また、自分の生を通して真実を伝えた人物でもあった。しかし、以上のような朱基徹の長老派中心の解釈は、——神社参拝に関する闘争で、朱基徹の非真理に関する非妥協的な抵抗精神などはあったが——朱基徹を排他的、閉鎖的な保守主義者として決め付けるものとなる可能性を持っている。そして、朱基徹の生涯にとって「殉教」は、重要な位置を占めているものの、「殉教」という大きな出来事に全ての焦点を合わせてしまうことは、朱基徹の思想全般を理解するには適切ではない。むしろ、「殉教」いう要因を除いて分析する必要性があると指摘している。金インソは、言論人であり、神学者であったが、個人雑誌「信仰生活」を通して、朱基徹の「殉教史話」と説教文を発表し、韓国で本格的な「朱基徹研究」の幕を挙げた人物として知られている。特に、金インソは朱基徹の説教を聞きながら資料を編集したが、今日韓国における朱基徹牧師の研究の殆どは金インソの資料に基づいている。李徳周は、朱基徹牧師の資料には、金インソの解釈が包含されている可能性があり、本格的な朱基徹牧師の研究をするためには、「文献批判」作業が必要であると指摘している。

以上のように、李徳周は朱基徹牧師研究の現状と課題とを指摘しているが、朱基徹牧師の研究は、文献に制約があるものの、そこには様々な意味が見出しうるように思われる。特に、教派を超えて研究されることは朱基徹研究の新たな出発点となるであろう。

3. 朱基徹の生涯

朱基徹の生涯は、大きく幼年時代、五山学校時代、平壤神学校時代、牧会時代に分けることが出来る。しかし、本稿では朱基徹の牧会時代に焦点を置き、議論を進める。特に、

牧会時代を釜山、馬山時代と平壤時代に分けて考察することにより、朱基徹の牧師としての思想形成の過程と同時に社会情勢との関わりを見るのが本稿の目的である。

3-1. 朱基徹の成長過程と社会的背景

朱基徹は、1897年慶南、昌原郡、熊川で生まれた。熊川は、朝鮮時代に日本人が頻繁に往来した地域であった。そして、最初の「カトリック宣教地」としても知られている。熊川地域で「朱」の名字の人々は、中国の宋代の儒学者である朱子を先祖として供養してきた。このことから分かるように、熊川は儒教の中心的な地域として、教育に関する関心も他の地域と比べて高い地域であった。特に、植民地時代に反日民族運動へ参与する人物には熊川出身者が多かった。^{*3} その中で代表的な人物が朱基孝(1867-1941)である。朱基孝は最初の私立学校である「開通学校」を設立し、教育に力を入れた。朱基孝と朱基徹は従兄弟の関係で朱基徹も「開通学校」で学び、卒業を間近にして、「五山学校」への進学を決心する。その契機となったのが、当時「五山学校」の教師であった李光朱が熊川で行った講演であった。「五山学校」は、西北地域を代表する民族主義の私立学校であったが、柳永楨^{*4}が講師として赴任したことをきっかけにキリスト教信仰を中心とした民族学校に生まれ変わった。そして、朱基徹も「五山学校」時代に洗礼を受け、正式なキリスト教徒になる。「五山学校」を卒業した朱基徹は、ソウルの「朝鮮イエス教大学」^{*5}の商科に進学をするが中退した。李徳朱によれば、商科を選択したことは、「五山学校」の時代に受けた教育——民族資本育成、民族経済復興——の影響であり、また熊川で事業を行う両親の期待に応じるものであったと指摘する。^{*6}

熊川に戻って来た朱基徹が、何の仕事に就いたかは明確ではないが、この時期に朱基徹は結婚をしている。そして、彼の人生にとって重大な転換点を迎える。それは、朱基徹が馬山で行われた教会の復興会に参席し、自分の罪を反省し回心したことである。その回心が契機となり、朱基徹は「平壤長老会神学校」に入学し、牧師としての道を歩むことになった。

3-2. 釜山と馬山牧会 (1926年-1936年)

朱基徹が神学校を卒業し、釜山の草梁教会の牧師に赴任した1926年は、日本の植民地政策に対する不満が朝鮮半島全土に広がった時期である。大韓帝国最後の王である「純宗」の葬式の日には、ソウルの中心街で「6.10万歳運動」が起き、朝鮮の人々の胸の内には独立に対する熱望が徐々に強まっていった。平壤神学校の論文を見ると、この頃の朱基徹は、社会問題や政局に興味を持っていたことが推測できる。^{*7}しかし、草梁教会では牧会のことに専念した。まず、朱基徹が草梁教会で行ったことは以下である。

「第一、教会組織の体制を民主的に整備した。

第二、教会の日曜学校や、幼稚園を通して教育牧会を強化した。

第三、教徒間の扶助の体制を築いた。

第四、厳格な勧懲を通して教徒達の信仰秩序を構築した。」^{*8}

注目すべきは、貧困層に対する教会の支援と厳格な勧懲による信仰秩序の構築である。勿論、厳格な勧懲を信徒たちに適用したのは、朱基徹に限定された問題ではなく、当時の教会における普遍的な状況にあった。すなわち、信徒たちの信仰生活を指導することによって間違った信仰形態に対しては厳格な「勧懲条例」を適応したのである。^{*9}朱基徹が草梁教会で行った牧会の特徴は、急激な変化を試みるのではなく、日曜礼拝と日曜学校を通して信徒たちの教育に力を入れたことである。しかし、朱基徹の思想の背景が、平壤神学校で学んだ聖書中心の保守的な神学であったことは明確である。1931年、朱基徹は草梁教会から、馬山教会に赴任する。その理由は馬山教会の内部分裂により、その問題を解決する責任者として朱基徹が推薦されたからである。馬山教会に就任した朱基徹が、まず力をいれたのは祈りと説教、礼拝を中心とする牧会であった。すなわち、教会の分裂により傷付いた教徒たちの心を癒すことに専念したのである。馬山教会の問題の解決と共に、朱基徹に対する牧会の能力は認められ、朱基徹は慶南老会(朝鮮イエス教長老会)の指導階牧師になる。そして、1932年慶南老会の老会長になる。朱基徹が老会長の時に目指したのは、「愛というイエスの精神に徹底した時代の福音を伝える教会」であった。

その理由の一つは、当時、キリスト教の内部における問題があったからである。朱基徹は長老会の総会で以下の報告をしている。

「本老会、教会の内部には白南鏞が唱道するイエス受肉説が流行し、それに感染した伝道師と信徒たちがおり、教会が混乱な状況である。」^{*10}

白南鏞は日本留学中、内村鑑三の聖書研究に参加し、キリスト教の信仰を持つようになって、帰国後、無教会主義の崔泰瑢とともに信仰覚醒運動を始めた。

「白南鏞は崔泰瑢と共に、… …「霊と真理」という雑誌と信仰集会を通して新たな信仰運動を展開した。その内容は、制度圏教会の化石化になった信仰と教義を非難する内容であった。信仰革命、霊的基督教、新福音などの言葉を使用しながら制度圏教会を批判する彼らの信仰運動は既存教会の保守的、元老の地位にいる指導者達に警戒の対象になるのは同然であった。」^{*11}

これらの運動は金教臣の「無教会主義」とともに、教会破壊主義者のレッテルが付き、異端的な思想として非難されたのである。このような状況の中でも、若い伝道師達は、白南鏞を招待し集会を開いた。問題は、白南鏞との関係で懲戒された伝道師達を教会に勤めさせたり、その伝道師らに集会を頼む教会があったことである。その結果、これらの事件

に関連がある伝道師達は、免職、職務停止などの処置を受けたのである。しかし、これらの処置が問題をさらに複雑にした。懲戒をうけた牧会者と彼らを支持する階層が、老会の委員達との間に無力の衝突が起きたのである。これらの事件は、当時の教会に大きな波紋を起こした。李徳周は次のように述べている。

「この事件は、1920－1930年代韓国の教会が持っていた革新と保守、世帯間の神学および信仰的な葛藤構造をそのまま見せてくれた事件であった。… …教義、信条中心の保守的な信仰構造に対して海外留学派である革新的な神学者と変化を望む若い世代の教会指導者達の挑戦が強かった。」^{*12}

事件発生と対応の時期に、朱基徹は慶南老会の「長」として、事件処理のすべての責任を負っていた。伝道師と長老11人が「出教」^{*13}する処置は朱基徹の決断によるものであった。

すなわち、朱基徹は異端的な要素がある信仰と思想に対しては厳しい態度を取った。その理由は、教会共同体が追求しなければならない共同の価値として、「保守的な信仰原理」の確立が必要であると気付いたのである。

3－3. 平壤牧会（山亭峴教会）

老会と総会を通して、朱基徹の名前は全国的に知られるようになった。その理由は、彼の職務能力に加え、名説教をする牧師^{*14}としての評判が高かったからである。彼は神学校を卒業してから10年ぶりに平壤に戻り、山亭峴教会^{*15}に就任することになった。山亭峴教会は、信徒数が千人余りの大規模の教会であった。当時、日本による「神社参拝」強要が大きな社会的問題になっていた。特にキリスト教徒、キリスト教系列の私立学校にとって、これは避けられない問題であった。朱基徹は、平壤の山亭峴教会の就任説教で、「民族運動と大韓民国の独立運動をするための方便として基督教を信じることと人格を磨いて道徳的な生活のするためにイエスを信じることは、基督教の根本真理と相違する」^{*16}と指摘している。他方で、「民族救援」が信徒らの社会的な責任であることも、エステル(4章13節)を用いて述べている。^{*17}エステルの話は、日帝の植民地統治下におけるキリスト教徒にとって挑戦であり、希望であった。さらに、朱基徹は若い世代が教会を離れ、社会主義に転向することに対して懸念を示し、伝道の重要性を力説した。1937年中国との戦争で勝利を得た日本は、厳しく「神社参拝」を強要することになる。そうした中、山亭峴教会で牧会に従事していた朱基徹は警察に検挙される。その理由は明確でなく、またその時期も不明である。しかし、日本キリスト教団の大会議長である富田満が山亭峴教会に訪問する前日に釈放されたことは『福音新報』に記録として残っている。^{*18}「神社参拝」をめぐる、山亭峴教会で行われた富田と朱基徹の論争内容は、朱基徹の発言については記録されていないものの、富田の発言内容は以下の通りである。

「諸君の殉教精神は立派である。しかし、わが政府が基督教を捨て、神道に改宗するように強要したのか。その実例を示してもらいたい。国家は国民になった諸君たちに国家の祭祀を要求したに過ぎない。……」^{*19}

李徳周は、富田の発言から朱基徹の主張を読み取ることができるという。つまり、「神社参拝は国家儀式ではなく、宗教儀式である。神社参拝を強要することは、信仰の自由を抑圧することであり、殉教の覚悟で神社参拝を拒否する」^{*20}ということである。

朱基徹は、同僚の牧師に、日本人は、「天皇は現人神と言い、吉凶禍福を祈る対象にしている。それを、宗教儀式ではなく、国家儀式として見るのはばかげた話である」^{*21}と述べている。しかし、富田が山亭峴教会を訪問した後、「神社参拝」に対する平壤老会の立場は次のように決まった。すなわち、親日的な団体も設立され、平壤の教会は「神社参拝」を受け入れることになったのである。親日傾向の『基督新聞』では、「神社参拝」は、宗教的な行事ではなく、国家の儀式であるから何の問題も生じないとの指摘がなされ、長老会の総会にこの問題が提出されるとの予測が示された。総督府も長老会の総会を注視し、総会が開かれる前に、問題になるような人物たちを事前に検挙したのである。このような状況の中、朱基徹と山亭峴教会の信徒らは、最後まで「神社参拝」を拒否した。「神社参拝」に対して、朱基徹を転向させることができないと判断した当局は、朱基徹と山亭峴教会を分離しようとした。まず、朱基徹を検挙し、信徒達を懐柔させようとした。それは、率先して「神社参拝」を行うこと、そして朱基徹の辞任を求める内容のものであった。宣教師であるバーンハイゼル(C. F. Bernheisel)は、当時の状況を次のように述べている。

「教会は神社参拝の問題に対して、彼(朱基徹)を積極的に支持し、一つになっていた。昨年(1939年)この問題で朱牧師が逮捕されたとき、この教会の長老3人も同じ疑いで逮捕されたが、彼らは神社に参拝すると約束して解放された。しかし、この約束を後悔し、再び、神社参拝をしないという確固たる姿勢を見せてくれた。」^{*22}

以上の引用からわかるように、「神社参拝」の問題で当時のキリスト教徒たちが——内部分裂は勿論——かなり揺れていたことがわかる。結局、1939年、朱基徹は拘束され牧師職から免職された。一年後、山亭峴教会も閉鎖される。山亭峴教会の問題は全国的に報道されたが、当時の教会は——「神社参拝」を受容する側としない側に——分裂状態にあった。朱基徹は、1938年に初めて拘束されてから、4度投獄され、5年間獄中にいた。最後の投獄は、1940年の「神社参拝」拒否者の一斉検挙の際であり、1944年獄中で殉教する。閉鎖された山亭峴教会の信徒たちは、地下教会を結成し、朱基徹が殉教するまで、獄中にいる朱基徹と連絡を取っていた。朱基徹は獄中で以下のように父なる神に祈った。

- 「1. 死に対する恐怖心に打ち勝つようにしてください。
2. 長期間の苦難に耐えるようにしてください。
3. 老母と妻子を父なる神にお任せいたします。
4. 義へ生き、義へ死ぬようにしてください。
5. 私の靈魂をあなたにおまかせいたします。」^{*23}

結局、朱基鐵は1944年4月21日、「平壤刑務所」で殉教した。彼の信仰の特徴は、「聖書中心主義」の立場から、「牧会」と「生」の意味を聖書に求めたことである。しかし、彼の思想を詳しく探求するには、(前述したように)一次文献の確保が必要であろう。とりわけ近年議論されているのは、「神社参拝」を拒否し、殉教したという、いわば彼の「抵抗運動」に対して、民族主義的あるいは政治的な動機が認められるのかどうか、という点である。

この問題は、研究者により見解が相違するが、李徳周は、民族動機の「内在論」を提示する。つまり、「内在論は外形的表現と内在的動機を区別することから出発する。朱基徹の抵抗運動が外見上は宗教的な様相を示していようとも、民族的な動機が、終始彼にとつては有意義な課題として存在し、内在的に作用していた」^{*24}ということである。

すなわち、朱基鐵の「殉教」と「抵抗運動」は、その解釈を巡って様々な議論はあるものの、韓国のキリスト教の躍進に大きな力として作用したことは確かであろう。

4. 展望

本稿では、朱基徹の生涯に焦点を合わせ議論を進めてきた。朱基徹研究の意義は二つに分けて考えることができる。まず、朱基徹本人の資料発掘を通して彼の思想全般を明確し、彼が韓国のキリスト教に与えた影響を分析することと、彼の研究を通して、当時の状況を分析することである。たとえば、韓国における無教会の問題、キリスト教に関する日本と韓国との関係、あるいは宣教師の問題などを挙げるができる。特に、朱基徹の研究で議論されている、民族と宗教との相関関係は、今日でも示唆するところが大きいであろう。暗黒時代を生きた朱基徹牧師の「生」を通して、その教訓を今日に活かすべきであろう。

注

*1 A. E. マクグラス『キリスト教の将来』(本多峰子訳、教文館、2002年、pp. 51-52.)

*2 李徳周著、『愛の殉教者、朱基徹牧師研究』(韓国基督教歴史博物館、2003年、pp. 11-18.)

*3 熊川出身の朱炳和(1879-1913)は、民族主義社会単体を設立し、民族運動を展開。朱基塔(1897

-1966)は、東京高等師範大学出身で「五山学校」の校長に就任。朱基榮(1909-1962)は、日本の東京、神戸で牧会をしながら『福音時代』という民族主義の教会新聞を発行し、日本の植民地政策を批判した事で服役する。

*4 柳永楨(1890-1981)。キリスト教思想家、金教臣と同世代で、咸錫憲の師。東京留学中、内村鑑三の講演を聴く。1921年「五山学校」から引退。キリスト教の韓国的な解釈で有名。一部では、西洋より早く宗教多元主義理論を構築したとの評価を受けている。

*5 今の延世大学の前身。

*6 李徳周著、『愛の殉教者、朱基徹牧師研究』(韓国基督教歴史博物館、2003年、p. 114.)

*7 同書、pp. 122-123.

その理由として、平壤長老会神学校時代に書いた朱基徹の論文を取り上げることが出来る。朱基徹は自分自身の初めの論文を「基督教と女性解放」というテーマで書いた。女性解放の問題は、当時の大きな社会問題であった。そして、女性解放の起源が基督教にあると主張したのである。従って朱基徹には「五山学校」の時から、民族主義と啓蒙思想が形成されたと見られる。

*8 同書、pp. 128-129.

*9 同書、p. 129.

*10 同書、p. 144.

*11 同書、p. 146.

*12 同書、p. 149.

*13 「出教」とは、長老会の教会から破門された事である。

*14 朱基徹は金剛山牧師修養会の講師を担当するなど、彼の説教には靈的感化が充満であるとの評判から、いつも信徒たちが大勢集まった。

*15 山亭峴教会。1906年平壤市鷄洞山亭峴に設立された長老教会。アメリカ北長老会宣教師バーンハイゼル(C. F. Bernheisel)と桂澤宣などによって設立された。民族主義的傾向が強い教会である。

*16 金チュンナム著『殉教者朱基徹牧師の生涯』ドリームブック、2007年、pp. 150-151。

*17 李徳周著『愛の殉教者、朱基徹牧師研究』韓国基督教歴史博物館、2003年、p. 117。

*18 同書、p. 195.

原文は朝鮮續信<福音新報>、1938年7月21日。

*19 李徳周著『愛の殉教者、朱基徹牧師研究』韓国基督教歴史博物館、2003年、pp. 201-202。

*20 同書、p. 202.

*21 同書、p. 232.

*22 同書、p. 233.

*23 金チュンナム著『殉教者朱基徹牧師の生涯』(ドリームブック、2007年、p. 233.)

*24 李徳周著『愛の殉教者、朱基徹牧師研究』(韓国基督教歴史博物館、2003年、pp. 350-351.)

朱基徹研究において、「神社参拝」を拒否した抵抗精神が純粋な宗教的動機であるのか、あるいは、民族意識が包含されているのかについて議論になっている。閔庚培などは、保守的な信

朱基徹牧師の殉教信仰

仰人になった朱基徹にとって「民族意識」は彼にとって目標にはならないと主張（不在論）。
反面、李マンヨルは、「民族の動機はあったと主張する」（共存論）。

(Bahng Junsik 京都大学大学院博士後期課程)

